

## 研究ノート

# 『瀛奎律髓』所収の「陸放翁」作品について

三 野 豊 浩

### 要 旨

元・方回の『瀛奎律髓』に陸放翁（陸游）の作品として収録されている五言七言の律詩を整理し、文字の異同、作品の重複、作者名の誤りなど、各種の問題について検討する。なお本稿は2006年8月に発表した中国語論文「略論『瀛奎律髓』所収録的陸游作品」を全面的に改訂したものである。

キーワード：宋詩，律詩，陸游，陸放翁，『劔南詩稿』，方回，『瀛奎律髓』

### はじめに

元・方回<sup>ほうかい</sup>（1227～1307）の『瀛奎律髓』<sup>えいけいりつずい</sup>（以下『律髓』）49巻は、唐宋律詩の大規模な選集として知られる。同書は、唐宋詩人385家の作品3014首——五言律詩（五言排律を含む）1597首，七言律詩（七言排律を含む）1417首——を収録している<sup>(1)</sup>。李慶甲<sup>りけいこう</sup>氏の『瀛奎律髓彙評』<sup>えいけいりつずい ひょう</sup>（1986年4月，上海古籍出版社。以下『彙評』）附録『瀛奎律髓作者篇目彙檢』<sup>えいけいりつずい さくしゃへんもく いけん</sup>によれば、『律髓』における収録作品数が多い詩人の上位10家は次の通りである。

順位	詩人名 (『律髓』における呼称)	時代	五律 (排律を含む)	七律 (排律を含む)	合計
1	杜甫 (杜工部)	盛唐	154	67	221
2	陸游 (陸放翁)	南宋	56	132	188
3	白居易 (白樂天)	中唐	60	67	127
	梅堯臣 (梅聖俞)	北宋	94	33	127
4	陳師道 (陳後山, 陳后山)	北宋	83	28	111
5	王安石 (王半山, 王荊公, 王介甫)	北宋	19	62	81
6	張耒 (張宛丘)	北宋	25	54	79
7	陳与義 (陳簡齋)	北宋～南宋	31	37	68
8	賈島 (賈浪仙)	晚唐	59	8	67
9	曾幾 (曾茶山)	北宋～南宋	27	36	63

このように、収録作品が最も多いのは杜甫であり、2位は陸游、3位は白居易および梅堯臣、4位は陳師道と続く。以下、宋人にはこの他王安石、張耒、陳与義、曾幾がおり、上位10家のうち7家までを宋人が占める。このうち陳師道、陳与義および曾幾は、いずれも黄庭堅を創始者とする江西詩派の重要詩人であり、特に陳師道と陳与義は黄庭堅と共に同派の「三宗」に数えられる。加えて、陸游は若い頃曾幾に師事し江西詩派の影響を受けており、後にその影響を脱し独自の詩風を確立したものの、広義の江西詩派と見ることができる<sup>(2)</sup>。また杜甫は江西詩派の「一祖」であり、黄庭堅をはじめとする詩人たちの学習と模倣の対象であった。このように、方回の詩の選び方は宋代なかんずく江西詩派の詩人たちを偏重する傾向にあり、このことは紛れもなく彼の価値観を反映している<sup>(3)</sup>。

1位の杜甫はひとまず置き、ここでは2位の陸游に注目したい。陸游(1125～1210)、字は務観、号は放翁、山陰(浙江省紹興)の人。南宋を代表する大詩人であり、また中国詩歌史上、現存する作品数が最も多い詩人でもある。その『劍南詩稿』(以下『詩稿』)85巻は合計9135首の作品を収録しており、この他に若干の「集外詩」が存在する<sup>(4)</sup>。前掲の『瀛奎律髓作者篇目彙檢』によれば、『律髓』所収の「陸放翁」作品は、五律56首(2首の五言排律を含む)、七律132首、合計188首である。形式別に見るならば、収録された五律の総数が陸游より多い詩人は5家存在し(順に杜甫、梅堯臣、陳師道、白居易、賈島)、陸游は6位にとどまる。しかし七律の総数では陸游は抜群の1位であり、2位の杜甫、白居易ですら陸游の約半数にとどまる。また李慶甲氏によれば、『律髓』に選録された宋代詩人は221家、作品総数は1765首であり、陸游の188首は宋人の作品総数の1割を越えている。こうしたことから、『律髓』における陸游の作品(特に七律)が大変大きな比重を占めていることがわかる。

## 『瀛奎律髓』所収の「陸放翁」作品について

しかし、『律髓』所収の「陸放翁」作品には、実に様々な問題が含まれている。まず、作品選択の偏向の問題がある。次に、『詩稿』との詩題の異同の問題がある。更に、作品の重複の問題があり、また作者の誤りの問題がある。本稿では、各種の文献を手がかりに、これらの問題を順次検討して行くことにしたい。

### 1、『瀛奎律髓』所収の「陸放翁」作品の概容

個別の問題の検討に入る前に、まず『律髓』所収の「陸放翁」作品を概観しておこう。『律髓』には合計49の分類があり、陸游の作品はそのうち次の27類に収録されている。これは全分類の過半数に相当し、決して少ないとは言えない。しかしその一方、陸游の作品をまったく収録していない分類も22に上ることは、注意しておかねばなるまい。

巻	分類	五律	七律	合計	巻	分類	五律	七律	合計
4	風土類	1	1	2	21	雪類	4	7	11
5	昇平類	0	4	4	22	月類	1	0	1
6	宦情類	3	7	10	23	閒適類	10	18	28
9	老寿類	0	4	4	24	送別類	0	3	3
10	春日類	6	12	18	32	忠憤類	0	2	2
11	夏日類	2	7	9	33	山巖類	4	0	4
12	秋日類	2	4	6	37	技藝類	0	3	3
13	冬日類	8	3	11	39	消遣類	1	12	13
14	晨朝類	1	0	1	41	子息類	1	1	2
15	暮夜類	2	1	3	42	寄贈類	0	2	2
16	節序類	5	2	7	44	疾病類	4	4	8
17	晴雨類	0	7	7	45	感旧類	0	6	6
19	酒類	1	5	6	48	仙逸類	0	2	2
20	梅花類	0	15	15		合計	56	132	188

陸游の作品は数量が膨大な上に内容も多彩であり、撰者がその気になりさえすれば、彼の作品から『律髓』のすべての分類に適した秀作を選ぶことも決して不可能ではないように思われる。たとえば、陸游は数多くの詠史詩（懷古類）、詠茶詩（茶類）、紀行詩（旅況類）、辺塞詩（辺塞類）等々を書き残している。しかし『律髓』のこれらの分類には、陸游の作品はまったく選ばれていない。このことから、方回の陸游作品に対する選択には、おのずから一定の偏向があることがわかる<sup>(5)</sup>。

第一に、『律髓』所収の「陸放翁」詩には「かんてきさいじ閒適細膩」の作が多く、「ひふんげつこう悲憤激昂」の作が

少ない<sup>(6)</sup>。方回が選んだ「陸放翁」作品を分類ごとに見てみると、1位は閑適類の28首、2位は春日類の18首、3位は梅花類の15首、4位は消遣類の13首で、以上はいずれも閑適詩に大別される。これらの合計74首はすでに『律髓』所収の「陸放翁」作品総数の3分の1を超過しており、その他の分類の作品もおおむね同じ范畴に属する。これに対し「悲憤激昂」の作は忠憤類所収の「書憤」2首（『詩稿』巻35）のみである。しかも73歳の時に書かれたこの連作は、11年前、62歳の時に書かれた同題の「書憤」（『詩稿』巻17）にもまして抑制された悲憤の表出となっており、ほとんど老境の諦念に近い。こうしたことから、『律髓』が陸游の「閑適細膩」の側面を偏重し、「悲憤激昂」の側面を意図的に排除もしくは抑制していることは明らかであろう。

『律髓』完成の年、方回は57歳であった。若い頃はどれほど血気盛んでも、加齢と共に多くの人は落ち着いた生活を志向するものであり、方回の選ぶ「陸放翁」詩に「閑適細膩」の作が多いことは、その年齢を考えれば自然なことかも知れない。しかし、果たしてそれだけであろうか。こうした選択がなされた背後には、宋末元初という時代状況およびそれに対する方回の身の処し方も、大きな要因として存在しているように思われる。

恭宗<sup>きょうそう</sup>の徳祐2年（端宗<sup>たんそう</sup>の景炎元年、元の至元13年、1276）正月、大挙して押し寄せた元軍<sup>りんあん</sup>は臨安（浙江省杭州<sup>こうしゅう</sup>）に迫り、宋は伝国の玉璽<sup>ぎょくじ</sup>を献上して降伏。元軍はついに臨安に入城し、宋は事実上滅亡する（この後、1279年に厓山の戦いで完全に滅亡）。同月、当時知嚴州<sup>げんしゅう</sup>（浙江省建徳<sup>けんとく</sup>）であった方回は城をあげて投降し、元朝より改めて建徳路総管を授かる。ほどなく方回は官を辞して錢塘<sup>せんとう</sup>（浙江省杭州）に寓居し、以後文筆で生計を立てる身となる。著述に専念する日々を過ごす中、『律髓』を完成させたのは至元20年（1283）。奇しくも、文天祥<sup>ぶんてんしょう</sup>（1236～1283）が大都（北京）で処刑されたのと同じ年のことである<sup>(7)</sup>。

南宋の遺民<sup>しゅうみつ</sup>周密<sup>きしんぎつしき</sup>の『癸辛雜識』によれば、元軍が北から侵攻して来た時、方回は徹底抗戦をとさえ、意気盛んであったが、いざ元軍がやってくる姿を隠し、人々はみな彼が戦死したものと思っていた。ところが、方回は嚴州の郊外で敵に降伏し、元朝の官服を着て馬にまたがり、意気揚々と帰って来たので、これを唾棄せぬ者はなかったという<sup>(8)</sup>。

もともと当時、破竹の勢いで進撃するモンゴル軍に恐れをなし、戦わずして降った者は数知れない。それに周密<sup>ことさら</sup>の記述は方回への殊更な悪意に満ちており、資料としては注意深く扱う必要がある。しかし少なくとも、方回を文天祥と同列に語ることはできないであろう。もちろん彼にも宋朝滅亡に対する感慨はあったであろうが、大勢はすでに如何ともし難い。漢族の宋朝が滅び、モンゴル人の元朝の時代となった状況は、当然方回の詩の選択に一定の制約として作用したであろう。そうした条件の下では、陸游の情熱的な愛国詩、特に攘夷的傾向の顕著な作品は、選ばれるはずもないのである。ちなみに『律髓』忠憤類は北宋の滅亡に際会した詩人たち（呂本中<sup>りよほんちゅう</sup>、陳与義<sup>ちんよぎ</sup>、劉子翬<sup>りゅうしき</sup>、汪藻<sup>わうそう</sup>、曾幾<sup>そうき</sup>）の作品を主に

『瀛奎律髓』所収の「陸放翁」作品について

選んでおり、南宋の詩人の作品は陸游以外には楊万里ようばんりと劉克莊りゅうこくそうを1首ずつ選ぶのみで、方回と同時代の宋末の詩人たちの作品は全く収録していない。

第二に、『律髓』に選ばれている「陸放翁」作品の大部分は詩人の晩年もしくは最晩年に書かれたものであり、若い頃の作品は少ない。この点については、次の表を参照されたい。なおここでは後述する『詩稿』未収録の「集外詩」、重複している作品および実際の作者が異なる作品は除いてある。

制作年	西暦	年齢	五律	七律	合計	制作年	西暦	年齢	五律	七律	合計
乾道8年	1172	48	0	1	1	慶元2年	1196	72	7	7	14
乾道9年	1173	49	0	6	6	慶元3年	1197	73	4	8	12
淳熙1年	1174	50	0	1	1	慶元4年	1198	74	4	6	10
淳熙4年	1177	53	0	1	1	慶元5年	1199	75	2	9	11
淳熙7年	1180	56	0	2	2	慶元6年	1200	76	0	5	5
淳熙11年	1184	60	0	3	3	嘉泰1年	1201	77	1	4	5
淳熙12年	1185	61	0	2	2	嘉泰2年	1202	78	8	9	17
淳熙13年	1186	62	1	3	4	嘉泰3年	1203	79	5	18	23
淳熙14年	1187	63	0	2	2	嘉泰4年	1204	80	2	1	3
淳熙15年	1188	64	0	1	1	開禧1年	1205	81	1	4	5
淳熙16年	1189	65	1	0	1	開禧2年	1206	82	3	3	6
紹熙2年	1191	67	0	2	2	開禧3年	1207	83	0	1	1
紹熙3年	1192	68	3	9	12	嘉定1年	1208	84	2	3	5
紹熙5年	1194	70	0	3	3	嘉定2年	1209	85	3	3	6
慶元1年	1195	71	5	9	14	合計			52	126	178

形式別に見るならば、『律髓』に選ばれた五律のうち最も早いのは62歳の作品であり、七律のうち最も早いのは48歳の作品である。しかし年代別に見るならば、40代と50代の作品を合わせても11首であり、60代の作品も27首にとどまる。これに対し70代の作品は114首であり、それだけで全体の過半を占め、80代の作品26首を合わせれば140首に上る。このように、方回は陸游の70代の作品を中心に、晩年の円熟した作品を多く選んでいることがわかる。中でも際立っているのは嘉泰2年～3年の作品の多さで、この2年だけで40首になる。この時期（陸游78～79歳）は、陸游が韓侂胄かんたうちゆうに招かれ、久しぶりに故郷の山陰を離れ行在所の臨安に赴いた時期に相当する。方回は、この間の陸游の行跡に何か感じる所があったのであろうか。

ところで、晩年の詩が多いということは、当然作者の老境をうたう詩が多いということであり、同時に懐古、回想の詩が多いことをも意味する。感旧類所収の七律「陳阜卿先生ちんふけい

兩浙の転運司考試官と為る。時に秦丞相の孫 右文殿修撰を以て来たりて試に就き、<sup>ただ</sup>直ちに首選ならんと欲す。阜卿 予の文巻を得、<sup>ぬきん</sup>擢でて第一に置き、秦氏 大いに怒る。予 明年既に<sup>あき</sup>顕らかに<sup>しりぞ</sup>黜けられ、先生も亦た幾ど危機に<sup>ほん</sup>陥らんとするも、偶たま秦公 薨じ、遂に<sup>や</sup>已む。予 晩歳 故書を料理し、先生の手帖を得、平昔を追感し、長句を作りて以て其の事を<sup>しる</sup>識すに、<sup>あ</sup>哀涕の集まるを知らざるなり」は、その代表例であろう。

以上を要するに、『律髓』に選ばれた「陸放翁」作品の大半は、詩人の晩年、特に70代以降に書かれた間適詩もしくは懐古、回想の詩である<sup>(9)</sup>。ただし、晴雨類所収「臨安に春雨 初めて<sup>は</sup>霽る」のような例外はあるにせよ、その中に人口に膾炙した名作は意外に少ない。『律髓』冬日類所収の五律「舍北 搖落し、景物 殊に佳なり、偶たま作る 五首」に添えられた無名氏の評語に、次のようにある。

放翁体格完渾、無他人破散支離之病、故称大家。但此集所選、多非其至者。此在品評家識見之淺深也。

放翁は体格完渾にして、他人の破散支離の病無く、<sup>ゆえ</sup>故に大家と称す。<sup>ただ</sup>但し此の集の選ぶ所、多くは其の至れる者に<sup>あ</sup>非ず。此れ品評家の識見の淺深に在るなり。

つまり、『律髓』に選ばれた陸游の作品は、必ずしも陸游の本領が十二分に発揮された傑作ではなく、このことは方回の見識の浅さによる、というのである。もともと『律髓』は、ほぼ同時期に出た『<sup>さんたいし</sup>三体詩』、『<sup>とうそうせん か れんじゅ し かく</sup>唐宋千家聯珠詩格』、『<sup>ぶんもんさんるいとうそうじけんせん か し せん ころんせん</sup>分門纂類唐宋時賢千家詩選 (後村千家詩)』などと同様、当時増加傾向にあった市井の作詩志願者たちを対象に書かれた書物であることは、おさえておかねばなるまい。『律髓』はそのいかめしい名称とは裏腹に、当時としては一般向けの書物だったのであり、そこに選ばれた詩は、おのずから当時の市民の好尚を反映しているはずである。とすれば、方回は良かれ悪しかれ一定の目的にかなった「それなりの作品」を選んでいるはずであり、作品選択に偏向があるからと言って、必ずしも彼のみを非難することはできないように思われる。

以下、同書に収録された「陸放翁」作品について、更なる分析を試みることにしたい。

## 2. 五言律詩に関する各種の問題

『律髓』所収の「陸放翁」五律は17類に分布し、合計56首である。そのうち「<sup>けいさい</sup>頃歳<sup>なんてい</sup>南鄭にて戎に従い、<sup>しば</sup>屢しば興鳳の間を往来す。暇日 旧遊を追憶し賦する有り」と「冬日感興十韻」は、いずれも20句から成る五言排律である。また間適類には4首の「集外詩」が含まれているが、これらは後述するように別の作者の作品と考えられる。

『瀛奎律髓』所収の「陸放翁」作品について

『律髓』所収の「陸放翁」五律の全題名は、次の通りである。詩歌の製作時期および地点は、せんちゅうれん 銭仲聯氏の『けんなんしこうちゅう 劍南詩稿注』(1985年9月, 上海古籍出版社。以下『校注』)の題解を参照した。表の「分類」は『律髓』のそれであり、「巻」は『詩稿』のそれである。原書の詩題には句読はないが、長い場合は適宜挿入した。また表記は原則として新字体に改めた。なお詩題の下に注がある場合は一律に省略した。

分類	『律髓』の詩題	巻	制作時期	場所	備考
風土	頃歲從戎南鄭, 屢往來興鳳間。暇日追憶旧遊有賦	76	嘉定1夏	山陰	五言排律
宦情	書直舍壁	52	嘉泰2秋	臨安	2首連作の其2
	致仕述懷	39	慶元5夏	山陰	6首連作の其1, 5
春日	春晚雜興	32	慶元1春	山陰	6首連作の其3
	暮春二首	35	慶元3春	山陰	2首連作
	小舟遊西涇, 渡西江而歸	35	慶元3春	山陰	
	初春雜興	50	嘉泰2春	山陰	5首連作の其2
	中春偶書	50	嘉泰2春	山陰	
夏日	北齋書志示兒輩	51	嘉泰2夏	山陰	
	五月初作	51	嘉泰2夏	山陰	
秋日	梅市道中	64	開禧1秋	山陰	2首連作の其2
	秋夜紀懷	35	慶元2秋	山陰	3首連作の其3
冬日	舍北搖落景物殊佳, 偶作五首	35	慶元2冬	山陰	5首連作
	殘臘	34	慶元1冬	山陰	2首連作の其2
	冬日感興十韻	38	慶元4冬	山陰	五言排律
	初寒獨居戲作	37	慶元4秋	山陰	
晨朝	晨起	33	慶元1冬	山陰	原書は冬日類に収録
暮夜	小舟過吉沢, 效王右丞	37	慶元4秋	山陰	
	五鼓不得眠, 起酌一杯復就枕	25	紹熙3冬	山陰	
節序	辛酉冬至	49	嘉泰1冬	山陰	
	己酉元日	20	淳熙16春	臨安	
	甲子元日	56	嘉泰4春	山陰	
	清明	36	慶元3春	山陰	
	上巳	57	嘉泰4春	山陰	
酒	醉中作	25	紹熙3秋	山陰	
雪	雪中二首	65	開禧2春	山陰	2首連作
	小雪	80	嘉定1冬	山陰	
	大雪月下至旦, 欲午始晴	18	淳熙13冬	嚴州	
月	夜中歩月	34	慶元2夏	山陰	

分類	『律髓』の詩題	巻	制作時期	場所	備考
間適	題齋壁	55	嘉泰3冬	山陰	2首連作
	自述	51	嘉泰2夏	山陰	3首連作
	書適	26	紹熙3冬	山陰	2首連作の其1
	幽事	集外	未詳	未詳	姜特立の作品
	葺圃	集外	未詳	未詳	姜特立の作品
	幽事	集外	未詳	未詳	姜特立の作品
	北檻	集外	未詳	未詳	姜特立の作品
山巖	遊山	54	嘉泰3秋	山陰	4首連作の其1, 4
	巢山	32	慶元1夏	山陰	2首連作
消遣	孤学	54	嘉泰3秋	山陰	
子息	哭開孫	66	開禧2春	山陰	
疾病	病中作	37	慶元4春	山陰	
	臥病雜題	84	嘉定2秋	山陰	5首連作の其4, 5
	病中示兒輩	85	嘉定2冬	山陰	

このように、『律髓』所収の「陸放翁」五律の大半は故郷の山陰で作られたものであるが、臨安、嚴州で作られた詩が若干存在する。なお『四庫全書』所収の『律髓』原書では「晨起」はなぜか冬日類五言の末尾に収録されている。詩題と内容から考えて、これは当然次の晨朝類に収録されるべき作品であろう。ここでは李慶甲『彙評』に従う。

以下、個別の問題について検討する。

### (1) 詩題の異同

『律髓』を『詩稿』と比較して、詩題に異同があるものは次の通りである。紙幅の都合もあり、今回は詩題の異同のみについて考察し、詩の本文の異同は不問とした。なお…の部分には異同はない。

分類	『律髓』の詩題	『詩稿』の詩題
風土	頃歲從戎南鄭…暇日追憶旧遊有賦	頃歲從南鄭…暇日追懷旧遊有賦
宦情	致仕述懷	致仕後述懷
春日	暮春二首	暮春
	小舟遊西涇, 渡西江而歸	小舟遊西涇, 度西岡而歸
冬日	舍北搖落景物殊佳, 偶作五首	舍北搖落景物殊佳偶作
	殘臘	殘臘二首
暮夜	小舟過吉沢, 效王右丞	小舟過吉沢, 効王右丞
節序	甲子元日	甲子歲元日
雪	雪中二首	雪中
	大雪月下至旦, 欲午始晴	大雪自夜至旦, 欲午始晴



## 『瀛奎律髓』所収の「陸放翁」作品について

○風土類「頃歲從戎南鄭…」。汲古閣本『詩稿』は冒頭を「頃歲從戎南鄭」とするが、錢仲聯『校注』は「頃歲從戎南鄭」とする。同詩の校記に「毛本無「戎」字、茲拋明刊別集本増」とある。

○節序類「甲子元日」。『律髓』詩題の下の原注に「題中元有歲字、今刪之」とある。

○雪類「雪中二首」。『律髓』と『詩稿』では詩の順序が逆になっている。

### (2) 作者名の誤り

『律髓』閒適類所収の「陸放翁」詩には、「幽事（日日營幽事）」「葺圃」「幽事（幽事春來早）」および「北檻」の4首の「集外詩」が含まれている。錢仲聯『校注』は、これらをすべて『放翁集外詩』の『逸稿統添』に収録し、題解に「此詩里居時作。亦見明刊『別集』本及『瀛奎律髓』卷二三」と記す。「明刊『別集』」とは明・劉景寅が『律髓』から「陸放翁」詩を抄録したものであり、その内容が『律髓』と一致するのは当然である。要するに、以上4首を陸游の作品とすることには、『律髓』にこれらが「陸放翁」作として掲載されていること以外の根拠は全く存在しない。ところが、これらの詩はすべて姜特立の詩集に収録されているのである<sup>(10)</sup>。

姜特立(1125～?)、字は邦傑、号は南山老人。陸游と同世代の南宋詩人であり、やはり80歳まで生きた。その詩集『梅山集』はすでに失われ、淳熙11年以後の作品を収録する『梅山統稿』が現存する。今日ではほとんど無名であるが、当時は相当な詩名があり、陸游、楊万里、范成大等と数多く唱和している。陸游と姜特立は同時代人である上に韓元吉を介して交流があり<sup>(11)</sup>、また作風にも共通性がある。それゆえ、方回が姜特立の詩を陸游の詩と誤認した可能性は十分ある。錢仲聯『校注』の底本は明・毛晋の汲古閣後印本<sup>(12)</sup>、『全宋詩』所収姜特立詩の底本は文淵閣『四庫全書』影印本であり<sup>(13)</sup>、いずれも信頼性の高い資料である。これらの詩はすべて『梅山統稿』に収録されており、『詩稿』には収録されていないので、本当の作者は陸游ではなく姜特立と考えるべきであろう。

もう一つ、『律髓』晴雨類は20句から成る五言排律「秋雨排悶十韻」を収録している。『律髓』はこの詩を曾茶山すなわち曾幾(1084～1166)の作品としているが、この詩は『詩稿』巻15に収録されており、陸游の作品であることは明白である(錢仲聯『校注』題解によれば、淳熙10年8月、山陰での作)。この詩の作者については、清・紀昀、許印芳および錢仲聯氏が異口同音に問題を指摘している<sup>(14)</sup>。また清・張景星等の『宋詩別裁集』巻7もこの詩を収録し、作者を陸游とし、詩題を「秋雨排悶」とする。もっとも、この詩は曾幾の『茶山集』巻4およびそれを底本とする『全宋詩』巻1655にも収録されている。おそらく方回は『茶山集』にもとづいてこの詩を曾幾の作品としたのであろう。

以上を要するに、『律髓』所収の陸游の五言排律は従来の2首に「秋雨排悶十韻」を加え

た3首、通常の五律は54首から姜特立の4首を除いた50首となり、真の陸放翁五言作品の合計は53首となる。

### 3、七言律詩に関する各種の問題

『律髓』所収の「陸放翁」七律の全題名は、次の通りである。

分類	『律髓』の詩題	巻	制作時期	場所	備考
風土	守巖述懷	19	淳熙14冬	嚴州	
昇平	入城至郡圃及諸家園亭，遊人甚盛	24	紹熙3春	山陰	
	乍晴出遊	52	嘉泰2冬	臨安	
	武林	52	嘉泰3春	臨安	
	西村暮歸	51	嘉泰2春	山陰	
宦情	入都	51	嘉泰2夏	赴臨安途中	
	史院晚出	51	嘉泰2秋	臨安	
	上章納祿恩畀外祠，遂以五月東歸	53	嘉泰3夏	臨安	5首連作
老寿	七十	29	紹熙5春	山陰	
	枕上作	35	慶元3春	山陰	春日類と重複
	八十三吟	70	開禧3春	山陰	
	戲遣老懷	65	開禧1冬	山陰	5首連作の其1
春日	春近	35	慶元2冬	山陰	
	睡起至園中	35	慶元2冬	山陰	
	立春日	35	慶元3春	山陰	
	春行	35	慶元3春	山陰	
	東籬	65	開禧2春	山陰	3首連作の其1
	春夏之交風日清美，欣然有感	32	慶元1春	山陰	3首連作の其2
	病足累日不出庵門，折花自娛	36	慶元4春	山陰	疾病類と重複
	春日小園雜賦	38	慶元5春	山陰	2首連作の其1
	晚春感事	22	紹熙2春	山陰	4首連作の其4
	枕上作	35	慶元3春	山陰	老寿類と重複
	甲子立春前二日	56	嘉泰3冬	山陰	
	暖甚去綿衣	集外	未詳	未詳	趙蕃の作品
夏日	幽居初夏雨霽	32	慶元1夏	山陰	
	初夏幽居	66	開禧2夏	山陰	4首連作の其2

## 『瀛奎律髓』所収の「陸放翁」作品について

分類	『律髓』の詩題	卷	制作時期	場所	備考
夏日	麦熟市米価減，隣里病者亦皆癒，欣然有賦	32	慶元1夏	山陰	
	幽居初夏	34	慶元2夏	山陰	4首連作の其2
	五月初夏，病体輕偶書	39	慶元5夏	山陰	疾病類と重複
	夏日二首	37	慶元4夏	山陰	5首連作の其3, 5
秋日	秋雨初晴有感	25	紹熙3秋	山陰	
	村居秋日	35	慶元2秋	山陰	
	秋晚書懷	64	開禧1秋	山陰	2首連作の其2
	舍北行飯書觸目	36	慶元3秋	山陰	2首連作の其2
冬日	冬晴日得閑遊偶作	26	紹熙3冬	山陰	
	冬晴閒歩東村，由故塘還舍	26	紹熙3冬	山陰	2首連作の其2
	十二月八日歩至西村	26	紹熙3冬	山陰	
暮夜	夜雨	33	慶元1冬	山陰	2首連作の其2
節序	新年書感	80	嘉定2春	山陰	
	人日雪	80	嘉定2春	山陰	
晴雨	臨安春雨初霽	17	淳熙13春	臨安	
	秋雨	23	紹熙2秋	山陰	3首連作の其1
	秋雨北榭作	18	淳熙13秋	嚴州	
	春雨	61	開禧1春	山陰	
	雨	61	開禧1夏	山陰	
	久雨	57	嘉泰4夏	山陰	2首連作の其2
	小雨初霽	42	慶元6春	山陰	
酒	小飲梅花下作	49	嘉泰1冬	山陰	
	六日雲重有雪意獨酌	50	嘉泰2春	山陰	
	小圃獨酌	42	慶元6春	山陰	
	對酒	38	慶元4冬	山陰	
	醉中自贈	31	紹熙5冬	山陰	
梅花	梅花	3	乾道8冬	赴成都途中	
	十一月八夜灯下對梅獨酌，累日勞甚頗自慰也	4	乾道9冬	嘉州	
	十二月初一日得梅一枝絕奇，戲作長句。今年於是四賦此花矣	4	乾道9冬	嘉州	
	苟秀才送蠟梅十枝奇甚，為賦此詩	4	淳熙1春	嘉州	
	樊江觀梅	17	淳熙11冬	山陰	

分類	『律髓』の詩題	巻	制作時期	場所	備考
梅花	梅花四首	4	乾道9冬	嘉州	4首連作
	漣漪亭賞梅	9	淳熙4冬	成都	
	射的山觀梅	17	淳熙11冬	山陰	2首連作
	園中賞梅	12	淳熙7春	撫州	2首連作
	梅	56	嘉泰3冬	山陰	
雪	雪	19	淳熙14冬	嚴州	
	作雪寒甚有賦	80	嘉定1冬	山陰	
	雪	18	淳熙13冬	嚴州	
	雪	26	紹熙3冬	山陰	
	大雪	17	淳熙12冬	山陰	
	雪中作	17	淳熙12冬	山陰	連作ではない
49		嘉泰1冬	山陰		
閒適	登東山	42	慶元5冬	山陰	
	題庵壁	44	慶元6冬	山陰	2首連作の其2
	山行過僧庵不入	82	嘉定2夏	山陰	
	閒中書事	32	慶元1春	山陰	2首連作
	小築	39	慶元5夏	山陰	
	窮居	32	慶元1夏	山陰	
	西窓	29	紹熙5夏	山陰	
	耕罷偶書	38	慶元4冬	山陰	
	小築	25	紹熙3秋	山陰	
	過隣家戲作	34	慶元2春	山陰	
	簡隣里	38	慶元5春	山陰	
	戲詠閒適	24	紹熙3春	山陰	3首連作の其3
	閒中頗自適，戲書示客	25	紹熙3秋	山陰	
幽居述事	55	嘉泰3冬	山陰	4首連作	
送別	杜叔高秀才雨雪中相過，留一宿而別，口誦此詩以送之	50	嘉泰2春	山陰	
	送陳懷叔赴上臯酒官，却還都下	54	嘉泰3秋	山陰	
	送任夷仲大監	52	嘉泰2冬	臨安	
忠憤	書憤	35	慶元3春	山陰	2首連作
技藝	贈童道人，蓋与予同甲子	34	慶元2夏	山陰	
	贈徐相師	集外	未詳	未詳	劉克莊の作品
	贈伝神水鑑	53	嘉泰3春	臨安	

## 『瀛奎律髓』所収の「陸放翁」作品について

分類	『律髓』の詩題	巻	制作時期	場所	備考
消遣	寓歎	53	嘉泰3春	臨安	
	後寓歎	53	嘉泰3春	臨安	
	初婦雜詠	53	嘉泰3夏	山陰	7首連作の其1, 2
	龜堂独坐遣悶	35	慶元2冬	山陰	2首連作の其2
	遣興	75	嘉定1春	山陰	2首連作の其1
	書興	76	嘉定1夏	山陰	
	遣興	40	慶元5秋	山陰	4首連作の其1
	書齋壁	40	慶元5秋	山陰	
	遣興	49	嘉泰1冬	山陰	2首連作
	雜興	42	慶元6春	山陰	2首連作の其2
子息	寄二子	52	嘉泰2冬	臨安	
寄贈	嚴州贈姜梅山	20	淳熙15夏	嚴州	
	寄姜梅山雷字詩 <sup>(15)</sup>	集外	淳熙16夏	山陰	
疾病	病足累日不能出, 掩門折花自娛	36	慶元4春	山陰	春日類と重複
	病癒	38	慶元4冬	山陰	
	五月初, 病体覚愈輕偶書	39	慶元5夏	山陰	夏日類と重複
	小疾兩日而愈	67	開禧2秋	山陰	
感旧	陳阜卿先生為兩浙轉運司考試官。時秦丞相之孫以右文殿修撰來就試, 直欲首選。阜卿得予文卷擢置第一, 秦氏大怒。予明年既顯黜, 先生亦幾陷危機, 偶秦公薨遂已。予晚歲料理故書得先生手帖, 追感平昔作長句以識其事, 不知哀涕之集也	40	慶元5秋	山陰	
	雪夜感旧	36	慶元3冬	山陰	
	憶昔	36	慶元3冬	山陰	
	感昔	33	慶元1秋	山陰	2首連作
	夢蜀	41	慶元5冬	山陰	
仙逸	湖上遇道翁, 乃峽中旧所識也	51	嘉泰2夏	山陰	
	贈道流	42	慶元6春	山陰	

五律同様、これらの七律の大部分は故郷の山陰で作られたものであるが、それ以外に、臨安、嚴州、嘉州<sup>かしゅう</sup>（四川省楽山）、成都<sup>せいと</sup>（四川省成都）、撫州<sup>ぶしゅう</sup>（江西省臨川）等で作られた詩がある。なお晩年の詩が多く選ばれていることは前述の通りであるが、梅花類のみ例外的に60歳以前の作品が大半を占めている。また雪類所収「雪中作」2首は1つの詩題の下にまとめられているが、実際は連作ではなく、制作時期に16年の距りがある。

以下、個別の問題について検討する。

(1) 詩題の異同

『律髓』を『詩稿』と比較して、詩題に異同があるものは次の通りである。

分類	『律髓』の詩題	『詩稿』の詩題
風土	守巖述懷	到巖十五晦朔，郡釀不佳，求於都下，既不時至。欲借書讀之，而寓公多秘不肯出，無以度日，殊惘惘也
宦情	上章納祿恩畀外祠，遂以五月東歸	上章納祿恩畀外祠，遂以五月初東歸
春日	春夏之交風日清美，欣然有感	春夏之交風日清美，欣然有賦
	病足累日不出庵門，折花自娛	病足累日不能出庵門，折花自娛
	甲子立春前二日	甲子立春前二日作
夏日	幽居初夏雨霽	夏雨初霽題齋壁
	五月初夏，病体輕偶書	五月初，病体益輕偶書
	夏日二首	夏日
秋日	村居秋日	林居秋日
冬日	冬晴閑步東村，由故塘還舍	冬晴閑步東村，由故塘還舍作
暮夜	夜雨	雨後
梅花	十一月八夜灯下对梅独酌…	十一月八日夜灯下对梅花独酌…
	梅花四首	梅花
送別	杜叔高秀才…口誦此詩以送之	杜叔高秀才…口誦此詩送之
寄贈	巖州贈姜梅山	旧識姜邦傑於亡友韓无咎許，近屢寄詩來，且以无咎平日唱和見示。讀之悵然，作此詩附卷末
疾病	病足累日不能出，掩門折花自娛	病足累日不能出庵門，折花自娛
	五月初，病体覺愈輕偶書	五月初，病体益輕偶書
	小疾兩日而愈	小病兩日而愈
感旧	陳阜卿先生…時秦丞相之孫…直欲首選…先生亦幾陷危機…不知哀涕之集也	陳阜卿先生…時秦丞相孫…直欲首送…先生亦幾踏危機…不知哀涕之集也

○夏日類「五月初夏，病体輕偶書」。錢仲聯『校注』の校記に「明刊別集本「初」字下衍「夏」字，無「益」字」とある。旧曆では初夏は4月であるから，錢氏が指摘するように「夏」は衍字と考えるべきであろう。

○暮夜類「夜雨」。汲古閣本『詩稿』は「雨後」とするが，錢仲聯『校注』は「雨夜」とする。同詩の校記に「「夜」，毛本作「後」，茲拋殘宋本目錄改」とある。

○寄贈類「巖州贈姜梅山」。汲古閣本『詩稿』は詩題の下に「須溪本作巖州贈姜梅山」と

『瀛奎律髓』所収の「陸放翁」作品について

記す。

○感旧類「陳卓卿先生…」。汲古閣本『詩稿』は「首選」を「首送」とするが、錢仲聯『校注』は「首選」とする。同詩の校記に「選、毛本作「送」、拋明刊別集本改」とある。

(2) 作品の重複

五律には作品の重複はないが、七律には重複が3組ある。すなわち、老寿類と春日類に見える「枕上作」、春日類の「病足累日不出庵門、折花自娛」と疾病類の「病足累日不能出、掩門折花自娛」、夏日類の「五月初夏、病体輕偶書」と疾病類の「五月初、病体覺愈輕偶書」である。これらの重複については過去の評者たちがすでに指摘しており、作品と評語の対応関係は次の通りである。

分類	『律髓』の詩題	評者	評語
老寿	枕上作	紀昀	此詩又見春日類中。
春日	枕上作	馮班	重。
		陸貽典	此首已見老寿類。
		查慎行	此詩已入前老寿類中，重出，当刪。
		紀昀	重出。
春日	病足累日不出庵門，折花自娛	なし	なし
疾病	病足累日不能出，掩門折花自娛	張載華	此詩已見春日類，重出。
		紀昀	重出。
夏日	五月初夏，病体輕偶書	紀昀	又見四十四卷疾病類，評語不同。
疾病	五月初，病体覺愈輕偶書	馮班	重出。
		查慎行	重見夏日類。
		紀昀	重出。

(3) 作者名の誤り

○春日類「暖甚去綿衣」。この詩は、実際には趙蕃<sup>ちやうはん</sup>の作品である。趙蕃(1143～1229)，字は昌父<sup>しょうほ</sup>，号は章泉<sup>しょうせん</sup>。陸游より18歳若い南宋の詩人で、『乾道稿』『淳熙稿』『章泉稿』等がある。この詩の帰属問題については、李慶甲氏の指摘がある<sup>(16)</sup>。

○技藝類「贈徐相師」。この詩は、実際には劉克莊<sup>りゅうこくそう</sup>の作品である。劉克莊(1187～1269)，字は潜夫<sup>せんぷ</sup>，号は後村<sup>こうそん</sup>。南宋後半の江湖派を代表する重要詩人で、『後村先生大全集』がある。この詩の帰属問題については、錢仲聯氏の指摘がある<sup>(17)</sup>。

このように、『律髓』所収の「陸放翁」七律には重複が3首あり、また作者が誤っているものが2首ある。それゆえ本当の総数は132首より5首少ない127首となる。

以上を要するに、『瀛奎律髓』所収の真の陸放翁作品は、五律53首(うち排律3首)、七

律 127 首、合計 180 首である。

## 結び

以上は、『律髓』所収の陸放翁作品を研究するための準備作業である。ここに提起した諸問題は必ずしも新しいものではなく、私はただこれまでの研究成果をふまえ、簡単な整理を行ったに過ぎない。しかし『律髓』所収の「陸放翁」作品は多数に上り、問題も多岐にわたるので、こうした作業にも一定の意義はあろうかと思われる。残念ながら、今回は『律髓』所収のその他の作者の作品には触れられず、また肝心の陸游の作品についても 1 首 1 首の内容にまで立ち入ることはできなかった。これらについては、今後の課題とさせていただきたい。

なお本稿は 2006 年 8 月に中国四川省成都市で開催された宋代文化国際学術研討会で発表した拙稿「略論『瀛奎律髓』所収録的陸游作品」(中国語)を基礎とするが、その単なる邦訳ではない。全体の構成はほぼこれを踏襲するが、その後の研究の進展をふまえ、全面的に改訂した。拙稿が『瀛奎律髓』を繙かれる諸賢にとって何らかの参考となれば幸いである。

## 注

- (1) 『律髓』所収の作品には重複が 22 首あり、実際は 2992 首。また『律髓』所収の五言排律は 87 首、七言排律は 7 首、合計 94 首。
- (2) 紹熙三年、68 歳の時に書いた七絶「示兒」(『詩稿』巻 25) で陸游は「文能換骨余無法」云々とうたい、江西詩派の詩論である「換骨奪胎」を肯定している。
- (3) 『律髓』節序類所収陳与義「道中寒食二首」の方回評…「予平生持所見、以老杜為祖…宋以後山谷一也、後山二也、簡齋為三、呂居仁為四、曾茶山為五…此詩之正派也」。また『律髓』變体類所収陳義「清明」の方回評…「嗚呼、古今詩人当以老杜、山谷、後山、簡齋四家為一祖三宗」。また清・顧嗣立『元詩選』初集所収の方回『桐江集』作者紹介…「嘗選唐宋以來近体詩評論之、名曰『瀛奎律髓』、於情景虛實之間、三致意焉。而尤以山谷、後山、簡齋為標準」。また李慶甲『瀛奎律髓彙評』前言…「方回選詩側重於宋代、入選一千七百六十五首、二百二十一家、比重超過唐代。江西派重要作家入選的作品也較多。這反映了方回崇尚江西詩派的立場」。
- (4) 『詩稿』収録の作品総数は村上哲見編「陸游『劍南詩稿』詩題索引」(1984 年 3 月、奈良女子大学中国文学会)による。陸游の「集外詩」には明・毛晋による『放翁逸稿』、錢仲聯による『逸稿統添』および『逸稿補遺』の 3 種があり、すべて錢仲聯『校注』第 8 冊に収録されている。
- (5) ただし収録数最多の杜甫(杜工部)も 49 類中の 28 類を占めるのみであり、状況は陸游の場合と大差はない。



『瀛奎律髓』所収の「陸放翁」作品について

- (6) 錢鍾書『宋詩選注』（1958年9月，人民文学出版社）陸游紹介……「他的作品主要有兩方面。一方面是悲憤激昂，要為國家報仇雪恥，恢復喪失的疆土，解放淪陷的人民。一方面是閒適細膩，咀嚼出日常生活深永的滋味，熨貼出當前景物的曲折的情狀。
- (7) 方回『律髓』序の末尾に「至元癸未良月旦日」とある。「至元癸未」は至元二十年（1283）。李慶甲『彙評』前言は「『瀛奎律髓』成書於元至元二十年（公元一二八二年）」と記すが、1283年の誤りであろう。
- (8) 周密『癸辛雜識』別集上「方回」…「（前略）以此遂得知嚴州。未幾，北軍至，回倡言死封疆之說甚壯。及北軍至，忽不知其所在，人皆以為必踐初言死矣。徧尋訪之不獲，乃迎降於三十里外，韃帽覆裘，跨馬而還，有自得之色。郡人無不唾之」。詹杭倫『方回的唐宋律詩學』（2002年12月，中華書局）附録二「周密『癸辛雜識』「方回」条考辨」を参照のこと。
- (9) 『律髓』閒適類所収陸游「書適」の方回評…「放翁老壽，為近世詩人第一。其閒適之詩尤多。…每首必有一聯一句佳」。また閒適類所収陸游「登東山」の方回評…「放翁詩万首，佳句無數。少師曾茶山，或謂青出於藍，然茶山格高，放翁律熟。茶山專祖山谷，放翁兼入盛唐」。
- (10) 『全宋詩』では「幽事（日日營幽事）」「葺圃」は巻2141に、「幽事（幽事春來早）」は巻2140に、「北檻」は巻2136に、それぞれ収録されている。
- (11) 次の陸游の詩題を参照のこと。「旧識姜邦傑於亡友韓無咎許，近屢寄詩來，且以無咎平日唱和見示。讀之悵然，作此詩附卷末（以前，亡友韓元吉の所で姜特立と知り合い，最近しばしば詩を寄こして來るようになり，しかも韓元吉との日頃の唱和を見せてくれた。これを読んでもの悲しい気持ちになり，この詩を作って卷末に附した）」（『詩稿』巻20）。なおこの詩は「嚴州贈姜梅山」の題で『律髓』寄贈類に収録されている。
- (12) 錢仲聯『校注』前言…「這里整理的『劍南詩稿』，以汲古閣後印本為底本」。
- (13) 『全宋詩』巻2132…「姜特立詩，以影印本文淵閣『四庫全書』本為底本」。
- (14) 紀昀『瀛奎律髓刊誤』…「此詩今載放翁詩集中，作茶山恐誤」。許印芳『瀛奎律髓輯要』…「作曾茶山詩，誤」。錢仲聯『校注』「秋雨排悶十韻」校記…「此詩收於『瀛奎律髓』巻一七晴雨類，作為曾幾詩，蓋誤」。
- (15) 錢仲聯『校注』は「寄姜梅山雷字詩」を『放翁集外詩』の『逸稿統添』に収録し，題解に「此詩淳熙十六年夏作於山陰」と記す。ここでは錢氏の判断に従う。
- (16) 李慶甲『彙評』例略…「正如清代的一些評点者所指出的那樣，方回原書在編選方面存在很多問題。…作品誤屬。如春日類卷十的七律中題為陸放翁作的「暖甚去綿衣」一詩，實為趙昌父所作」。なお『全宋詩』では「暖甚去綿衣」は巻2642に収録されている。
- (17) 錢仲聯『校注』『逸稿統添』所収「贈徐相師」題解…「未詳寫作時地。亦見明刊別集本及『瀛奎律髓』巻三七。劉克莊『後村先生大全集』巻四『南岳第三稿』中有此詩，疑是劉詩，後人誤以為陸作」。また『全宋詩』巻2241卷末「存目」…「此為劉克莊詩，見『後村集』巻四」。なお『全宋詩』では「贈徐相師」は巻3036に収録されている。